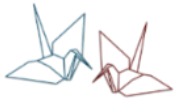


未来に向かって伸びる鶴嶺の子

鶴小だより 9月号

茅ヶ崎市立鶴嶺小学校
校長 日高 大司郎
令和5年8月31日発行



終戦の夏に・・・

序 (原爆詩集)

ちちをかえせ ははをかえせ
としよりをかえせ
こどもをかえせ
わたしをかえせ わたしにつながる
にんげんをかえせ
にんげんのにんげんのよのあるかぎり
くすれぬへいわをへいわをかえせ

峠三吉さんの原爆詩集の冒頭の部分です。お読みになったことがありますか。

僕が小学校6年生の時の担任、佐藤正博先生は自分の学級の子どもたち全員に「原爆詩集」の中程にある「倉庫の記録」の部分を、ガリ版印刷で配って下さいました。一部抜粋します。

倉庫の記録 ～その日～ いちめん蓮の葉が馬蹄型に焼けた蓮畑の中の、そこは陸軍被服廠倉庫の二階。高い格子窓だけのうす暗いコンクリートの床。そのうえに軍用毛布を一枚敷いて、逃げて来た者たちが向きむきに横たわっている。みんなかろうじてスロースやモンペの切れはしを腰にまとった裸体。

足のふみ場もなくころがっているのはおおかた疎開家屋の跡片付に出ていた女学校の下級生だが、顔から全身へかけての火傷や、赤チン、凝血、油葉、繻帯などのために汚穢な変貌をしてももの乞の老婆の群のよう。

壁ざわや太い柱の陰に桶や馬穴が汚物をいっぱい溜め、そこらに糞便をながし、骨を刺す異臭のなか

「助けて おとうちゃん たすけて
「みず 水だわ! ああうれしいうれしいわ
「五十銭! これが五十銭よ!
「のけて 足のとこの 死んだの のけて

※ 峠三吉「原爆詩集」より

78年前、1945年8月15日に、日本は終戦を迎えました。玉音放送で、戦争の終結が伝えられたのです。どのような思いで、日本人がその放送を聞いたのか・・・。僕らには、想像してみることしかできません。しかし、僕らがこの時代の人々に思いを馳せるといことが、とても大切な大事な営みなのではないかと考えています。

先の戦争が終結して、長い年月が流れました。戦争を体験した方から、直接そのお話を聞くこともどんどんできなくなってきています。僕たちが、

「戦争」を知らない、知ろうとしないということは、ただそれだけで、戦後ではなくて戦前になるのではないかということを感じて、怖くなってしまいます。

ロシアによる、ウクライナへの侵攻のニュースを聞いたとき、怒りとともに軍事介入が必要だと思った方はいらっしゃらなかったでしょうか。それは、「正義」があれば、武力を行使してもよいという考え方です。そう考えるその前に、戦争の時代の人々のことを考えてみたい、しっかりとその時代に生きた人の気持ちに寄り添いたいと思います。

広島にしろ、長崎にしろ、沖縄にしろ、大空襲に襲われた各地にしろ、日本が侵攻した他国にしろ、そこに住む人々は、それぞれに繋がりが、いつもと変わらぬ日常を過ごしていたわけです。勿論戦争中で、食べ物がなかったり、たくさんの不自由があったりしたことでしょう。でもその中で、たくましく、互いに支え合って、生きていたはずで

それが、ある時間を境に一変してしまう。当たり前だったことが当たり前ではなくなり、つながりがあった糸が無残にも引き裂かれてしまう。そんな悲しい思い・思い・思い、数え切れない悲しみ。その悲しみこそが、「戦争」の実相なのではないかと考えています。憲法の第九条は、

1、日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。としています。

「正義」があれば、誰かの生活を踏みにじることは許されますか。多少の犠牲はやむなしと言えますか。そんなこと、よい訳がありません。しかし戦争についてきちんと知らないでいると、どんなことが行われるのが戦争なのか、そこに暮らす人々は、どんな思いをするのかという一番大切にされなければならないことを、「正義」という錦の御旗のもと踏みにじることになってしまわないでしょうか。

だから、僕たちは「戦争」を、「あの時代に生きた人々」を知らなければいけません。そして、知ったことを子どもたちに、次の世代へと伝えなければならない役目もあります。人は、人の感情をとおしてその事実を実感するものです。

八月になると毎年僕は、あの時代の「悲しみ」をできるだけ沢山、心に刻まなければならないと、焦りにも似た気持ちを抱いてしまうのです。